

[研究ノート]

Pearl S. Buck の伝記作品について
—The Exile と Fighting Angel—

佐藤重夫

- <目次> 1 The Exile
2 Fighting Angel

大部分の一般読者は勿論、多くの文芸批評家や歴史家でさえも、Pearl Buck のノーベル文学賞受賞は、The Good Earth によるものである、という強い印象を持っている人が多い。⁽¹⁾これは、はっきり言って真実を衝くものではない。ノーベル賞委員会は、授賞の際の表彰状の中で、「中国の農民生活の含蓄ある叙事詩的描写と、伝記文学の傑作のために」⁽²⁾与えられたものだ、と明確に述べている。

ノーベル文学賞を受賞した最初の女流作家で、ノーベル賞委員会のメンバーであったスウェーデンの Selma Lagerlöf 女史は、Pearl Buck の作品選衡に当たって、特に彼女の父親の伝記に卓越するものがあり、これこそ授賞に値するものとして投票の際に賛成票を投じたことを明らかにしている。⁽³⁾

この二つの事実が、まさしくノーベル賞に相応しい伝記文学の重要性を指摘しているものだと言えよう。Pearl Buck の書いた伝記文学とは、母親を描いた The Exile と父の人物像である Fighting Angel の二つの作品である。いずれも 1936 年に発表されたものである。これについて論評を加えたい。

I The Exile

The Exile は、事実上、Pearl Buck の最初の作品である。⁽⁴⁾1921 年母親の死後間もなく、Pearl Buck は家族の回想録として母親の伝記を書き始めた。完結後、原稿は高い戸棚の中に仕舞い込まれたままになっていたが、その後、1926 年から 1927 年にかけての革命中に、南京の Pearl Buck の家は略奪された。幸い、母の伝記であるその原稿は、盗まれたり、破棄されたりせずに残されていた。後年、原稿は修正を加えられながら完成したものに仕上げられたが、彼女の文学的地位が確立するまでは、この作品を世に問うことはしなかった。作品としては、登場人物の名前だけを変えてあるが、それ以外はすべて事実に基づくものだ、と Pearl Buck は言明している。主な変名としては、Caroline を Carie、夫の Absalom を Andrew、若い Pearl Buck 自身を Comfort に変えている。

Pearl Buck の母、Caroline Sydenstricker の旧姓は Stulting といった。Stulting 一家はオランダの出身であったが、宗教的迫害を受けて、家族はオランダを去り、アメリカに移住する。はじめ、彼等はペンシルベニア州に定住したが、そ

こで土地売買の詐欺に遭い、間もなくウェスト・バージニア州に転居する。

Caroline Stulting はあまのじゃくな性格であるが、反面、冗談好きで、機知に富み、思考もしっかりしている。ただ、突然カッとすることがあるかと思えば、すぐにおさまるといったはげしい気性だが、とにかく、魅力のある女性である。読書や音楽、庭の手入れや自分の子供達と戯れることなどが好きだった。それに、歌を歌ったり、作曲したりすることも好きで、全くの楽道家である。その反面、彼女の性格の中には、清教徒的な厳しさが流れている。彼女はよく神に救いを求めようとするものがあつたが、そのたびに、以後ますます神に祈りを捧げ、信仰心を深くしようとして心に誓うのであつた。宗教心がなくなれば、神のよきお導きもなくなるのではないだろうか、とひそかに悩んだりもする。若いけれども、分別のつく年頃になると、人を救ってあげることが何よりも望ましいことだと考える、ある精力的な若者の魅力にとりつかれるようになる。この若者から、後に求婚されることになるが、彼に対する彼女の愛情は、日々募るばかりであつた。だが結局、彼の求婚を断わることになる。彼の求婚を断わる理由について、Caroline はこう説明している。

He was not good. He drank and he came from a family that drank. It wasn't easy to be good, and I was afraid if I married him I might grow like him.⁽⁵⁾

幼いころの Caroline Stulting は、確信を持って神の存在を信ずることができるようになり、神の啓示を求めたものである。もし、神がその存在を何らかの形で示してくれるならば、Caroline はすべて神にわが身をまかせようと決意する。頭の中が散漫になっていた彼女だが、もし、神が自分を勇気づけてくれるなら、自分は宣教師になってもよいと考えた。彼女にとって、特に苦しい試練の時期がやってくるが、それはちょうど母親が重病に倒れたときであつた。Caroline の母親が臨終の間際に、最後に言ったのが――

Why—it's——all true!⁽⁶⁾

という短い言葉であったのだが、この言葉こそ自分が長く待ち侘びた神の啓示であったのではないかと、Carolineは思う。それからというものは、神の呼びかけに身を委ねる決心をすることになる。

ウェスト・バージニア州での教育を終えた Caroline は、ケンタッキー州のルイスビルという町の近くにある教養学校に入学する。これは若い女性が社交界に出るための教養を教える学校である。22歳のとき、家に戻るが、そのときはじめて、宣教師になる考えを父親に打ち明ける。しかし、父親は断固として、それを許そうとはしない。Absalom Sydenstricker は Caroline の教会の所属牧師である弟を訪ねていた。この青年 Absalom が、中国へ宣教師として派遣されるのを希望しているということを聞いて、彼女は彼に自己紹介し、自分も同じ考えを持っていることを彼に告げる。次第に彼は彼女に関心を示すようになり、当然受けた彼のプロポーズを、彼女は父親の反対を押し切って承諾する。Caroline はすぐ敬けんな祈りを捧げて、崇高な気持ちとなり、相手の若い牧師は、彼女の存在そのものが自分の心の琴線に触れた思いがする。2人は1880年7月18日に結婚する。そして、その足で中国への旅へと出発する。

中国における Caroline の生活は決して満足できるようなものではなかった。彼女と夫は性格的に全く反対である。彼女は家庭の関心事も、職務上の関心事も、夫婦共々力を合わせていきたいという願望を持っていたが、夫は彼女を仕事の協力者としてではなく、単に家事だけに専念する、いわゆる専業主婦として取り扱うこと以外、望んでいなかったことを知る。夫は、「女性はすべて男性に服従するものでなくてはならない」という聖パウロの教えを強調する。妻の Caroline は、鋭敏で聡明な女性であったが、さすがに夫の狭量さ、浅慮さにはいら立ちを抑え切れなかった。ついには、夫の傲慢さ、わがまま、強情さを恨むようになる。

神に関する Caroline の昔からの疑念は、決して消え去るものではなかった。神の恵みにより授かった7人の子供のうち、4人も中国で亡くしている。恐らく、十分な治療を受けていたか、あるいは、アメリカのような、健康を重視する国に暮っていたならば、子供達の死も回避することができたであろう。Caroline は、神に強いられた犠牲者ではないのかと思い、恨むようになる。彼女が

中国で体験した貧困、苦難、窮乏などを考えると、どうしても神を信ずることができなくなるのである。にもかかわらず、神が存在しているという信頼感を、不満ながら認めないわけにはいかなかった。「他に信ずるものがなく、ただ、はっきりと善と思われるものを信ずることが、自分のような自信過剰な気質に絶対に必要な⁽⁷⁾ので、神への希望にすぎる」ほかないと思っている。彼女が死期に近づき、病床に伏しているとき、夫が傍に近づくのを嫌い、厳しい、怒りっぽい、剛直な「全能の神」という夫の考えを拒絶するのだった。このとき、娘達に「ダンスとか、笑いとか、美しいものとかといったような、この世に幸福で明るいものを選ぶようにしなければ駄目ね。今度生まれ変われば、罪深いものと思わないで、きつと⁽⁸⁾その方を選ぶでしょうね」と語っている。

夫婦間の意見の相違が深まることに気づく彼女は、アメリカへの憧れが強くなっていく。常に、ウェスト・バージニア州の生まれ故郷や家族への痛烈な愛情を持っていた。子供達には、絶えずアメリカでの生活の話を語り、それを聞く子供達の心を生き生きとさせた。彼女は、特にアメリカでの休暇を楽しみにしていたが、いざアメリカへ帰ってみると、不幸にして自分の生まれ故郷や、その周辺が変貌しているばかりでなく、親類縁者の数もかなり少なくなっていた。アメリカという国は、自分との関係を断ち、自分の存在を忘れようとしているのではないかと疑心をいだくようになる。暫くして、彼女はこうした状況にいささか甘んじざるを得なくなったが、少なくともアメリカを常に記憶の中に留めておこうとする。しかし、彼女に決してホームシックがなくなったわけではない。流浪者にすぎなかったのである。ある日のこと、Pearl Buckは中国のある地方で生活し、働くため暫くの間母親の許を離れたい、と思ったことがある。母親はそれを止めさせようとしたが、娘は言うことをきかず、厳しくとがめられたことがある。そのとき、Pearl Buckは仕返しに、母親のCarolineが父親にさからって宣教師と結婚し、中国へ渡ってきたことを思い出させてしまう。Pearl Buckの言葉を聞いた母親は、「父に背くべきではなかった。父の忠告⁽⁹⁾を無視して本当に悪いことをしてしまった」と述懐する。

神の存在に対する個人的な不信心、夫への幻滅感が、時折、頭をもたげてくるが、それでも夫の伝道事業をできるだけ援助しようと努力する。中国に来る

早々、彼女は結核にかかり、医者からアメリカへ帰ることを助言される。しかし、その助言に従って、夫の仕事を中断させることよりも、2人で中国北部に転地療養に出掛けることを強く望んでいた。それが実現し、そこで治療を受け、良好な気候も幸いして、彼女は病気を克服することができた。夫の Absalom が新約聖書の中国語訳にとりかかりたいと望んだとき、Caroline は、夫のその仕事を援助した。つまり、徹底した自制心と極端なほどの節約によって、この中国語訳聖書の出版が何版も重ねられるように、十分な準備金を貯めるようにした。⁽¹⁰⁾ Absalom が引退の年齢に近づくと、新しい考え方や、いろいろな方策を身につけた若い宣教師達は、絶えず、彼の実践行動を非難するのである。しかし、そのたびに Caroline は、夫に対し忠誠と献身的な愛情を示しながら、彼をしっかりと擁護するのだった。⁽¹¹⁾

中国における Caroline の異常な体験というものは、どれも勇壮なものであった。1900年の義和団による北清事変のさなかに、彼女と子供達は生き延びるために避難しなければならなかったし、また、夫が地方旅行へ出掛けていたときも、真夜中に彼女の家の門前に集まってきた群衆によって、Caroline と子供達は生命を奪われる危機にあった。当時、この地方に住んでいた白人と言えば、彼女と夫、それに自分の子供達だけであり、群衆は、この地方の人々を疫病にかからせた大旱魃の責任が白人達にあると言って非難するのだった。群衆が集まったとき、Caroline は門前に出て行き、門を開いて、自分の子供達を呼んで、群衆に湯茶を振る舞った。彼等は、Caroline の示す勇氣と親切、それに、その場所での悪意のない行為に驚然として、間もなくちりぢりに去っていく。このような冒険体験のわずかなは、19世紀末から20世紀初期の中国に住む白人達の日常茶飯事のことであったのである。

彼女の夫としてみれば、妻が家事に専念してもらうことを望んでいたのであろうが、実際は伝道事業にほとんど関わっていた。伝道事業と言っても、それは実践的な日常活動面だけである。彼女は中国人の精神面よりも肉体の清潔や健康に、より関心を持っていた。彼女は皮膚病や、その他の単純な病気を治療したりする小さな診療所を設けた。そして、時間の許す限り、いつも病気を持つ多くの親や赤児達の面倒をみたりした。健康の問題や、家庭内の問題をかか

えている中国女性がいれば、その相談に応じたり、それを援助するため、常に家庭訪問をしたりしていた。彼女はよく学校へ教えに行き、学生達に清潔さ、その他の健康法などを指導したりしたが、子供達の体の健康に触れる場合、彼等の精神面を忘れていたのではないかと懸念していた。

母親に関する Pearl Buck のこの伝記には、多くの点で、不幸で欲求不満な生活を送る、多面的な女性の全体像がよく描かれている。かつて Pearl Buck は、Ida Tarbell の自叙伝を賞賛したことがあるが、それは、特に、Tarbell がその作品に全力を注入していたからで、この基本条件こそが、優れた伝記を書く、不可欠な要素であることを確信している。⁽¹²⁾ この特徴が The Exile の作品の中に明示されている。Caroline Sydenstricker の心情が、この作品のいたるところに感じとられているが、それがなかなか洞察できないのである。

もし、Caroline が自分の生涯を振り返ることができたとすれば、それは失敗であつたろうと思うに違いない、と Pearl Buck はみている。その理由は、主として Caroline の美の探求や精神的充実感が決して十分ではないからである。しかし、Pearl Buck としてみれば、母の心が満たされなかったのは、現実と神秘、⁽¹³⁾ 懐疑と宗教が混然としていたからであろうとも思っている。

The Exile は、1人の宣教師の妻としての描写が極めて率直で、しかも、完全なものではあるけれども、欠陥がないというわけではない。時折、この伝記はあまりに感傷的になり過ぎるところがあるが、こうした傾向が、特に Caroline Sydenstricker の青春時代における取り扱いや、家庭や家族に対する情愛、更に、絶えざるアメリカへの忠誠心や憧れなどに表面化している。例えば、Pearl Buck が結婚するときの様子や、Caroline の最愛の兄 Cornelius が死ぬときのような場面では、過剰な感情が働いているばかりでなく、文体そのものが、美辞麗句に走り過ぎたり、きゃしゃなところがあり過ぎたり、または、近代的な手法としてはロマンチックであり過ぎるところがあつたりする。その上、The Exile は、主要な素材を明確に決め、しっかりと引き締めねばならない場合に、とかく、散漫過ぎたり、繰り返しが多くなったり、くどくどなり過ぎたりする個所が散見される。しかし、以上のような弱点がありながら、Caroline Sydenstricker に関する描写が強く印象に残り、性格分析が実に説得力のあるものであるのも事

実である。この作品は、主に外面的な彼女の人生、経験ばかりでなく、それ以上に重要なことは、彼女の心の中に引きずり込まれ、彼女の強い願望、衝動、精神不安、悲哀、それに、欲求不満などを理解させるのに実に説得力のある伝記であると言える。

II Fighting Angel

The Exile が伝記の秀作とすれば、Fighting Angel は、それ以上の逸品とさえ言えよう。The Exile が時折、冗長過ぎたり、繰り返しが多過ぎたりするが、Fighting Angel の場合は、それ以上に文体が整然としており、焦点がぴったりしている。Pearl Buck が母親を非常に尊敬し、熱愛していたので、所々 The Exile の方が感傷的なところが見受けられる。しかし、父親に対しては、それほど好意的でなく、どちらかと言えば、客観的であったため、Absalom Sydenstricker の描写には、いっそう無慈悲な、手荒い手法が展開されていく。この扱い方により、伝記が結果的に、更に効果的なものとなったという事実が、Fighting Angel と、1931 年 Absalom の死後間もなく書かれた略伝 “In Memoriam : Absalom Sydenstricker, 1852-1931”⁽¹⁴⁾ の比較からよく感じられるところである。

In Memoriam は主として、Absalom Sydenstricker の生活における実話であり、それは、彼の顕著な業績、つまり、北方中国に長老派の布教施設を設立する先駆的な事業、中国における神学校の創立、新約聖書の中国語訳などの業績を強調する賛美の文章で綴られている。これらの業績はすべて、率直な、好意的な文章で記録されている。In Memoriam というこの略伝の取り上げ方がかなり好意的であるため、純然たる性格描写と完全無欠な分析の中で、魅力的な研究対象とされる Fighting Angel の、より客観的で均衡のとれた内容とは、まさに対照的となっている。

Absalom Sydenstricker は、ウェスト・バージニア州の、傲慢な農家の 7 人息子の 1 人で、そのうちの 6 人は牧師となっている。彼等はすべて 21 歳になるまで農業に従事しなければならなかったが、それ以後は自分達自身の運命を切り開くため自由の身となった。Absalom もその年頃になると、父親の農場を離れ

て、Frankfort Academy に入学する。そこで1年間学んでから、Washington and Lee University へ進学する。この大学時代に、彼はひどく貧しく過ごしたが、大学へは変わらぬ情熱を注ぎ込んだ。彼は優等生として卒業することになるが、それから暫くして、宣教師となるため、長老派の神学校に入学する。父親は彼のこの欲求に強く反発するが、母親の方は、もし中国へ連れていけるような妻を見つけることができれば、という条件付で承諾する。Absalom は極めて恥ずかしがりやで、女の子には少しも目をくれようとはしなかった。ところが、Caroline Stulting と巡り会うと、たちまち結婚へと進んでいった。いろいろな面で、母親が彼の結婚の相手と望んでいたのは、単なる便宜的な妻、つまり、息子にしばしば忘れられ、表面に立たないような名目だけの妻であったのである。結婚後、いざ中国へ出発する段階に来ると、Absalom は汽車の切符を自分だけの分しか購入しないほどの放心状態になっていた。

それでも、Absalom 夫妻が中国へ向かうころから、彼は宗教という聖職に献身していたので、極めて幸福な、満足そうな日々を送り、愛する聖職を遂行していった。2人は中国に到着すると、1日8時間、週に6日間の中国語の勉強に取りかかった。Caroline はうんざりすることが度々で、落ち着きがなくなっていた。こんな激しい努力までして、いやにならないものか、と Absalom に尋ねると、彼は「自分が最もやりたいと思っている仕事のために必要な知識を身につけようとしているのに、いやになるはずがないではないか」と答えている。それ以外のことはすべて——家族の幸福に関係することでも——彼の伝道事業に対する熱意の前には無情にも犠牲にされた。彼は絶えず、伝道の長旅に出ており、町や村を訪れ、茶店に立ち寄りたりして、群衆の集まるのを待った。集会の席では、まず自分がアメリカ人であることを自己紹介し、次いで出席者達の住む地域社会について尋ね、それから説教を始める。そして、終わるころには、宗教関係のパンフレットを無償で配布するか、頒布するかして、集会所を去っていく。暫くして、この集会所に戻ってきて、群衆を集めて再び説教を始める。こうしたパターンが常に繰り返された。道路に面する部屋を借り、いくつかの長椅子を用意して、仮の礼拝所を作るのである。ここで何人かの改宗者が出ると、同じような行動が別の村落においても繰り返される。このような新しい礼

拝所を管理する責任は、別の地域社会から来た、比較的経験を持つ改宗者が当てられた。Absalom は当時、年 2 回ほど新礼拝所を訪れ、必要な宗務を執り行うのであった。

改宗者自身は大勢いた。すなわち、心の平和を求める老婦人、仕事先を探す人、英語を学び、大都会で就職したい人、あるいは、神はすべて恩恵を施してくれると信ずる人、説教師の熱意に引きつけられる人など、さまざまであった。

Absalom が中国人から敵意を抱かれたのは、一度や二度ではなかった。殴られたり、強奪に遭ったり、投石を受けたり、ののしられたりした。かつて、彼が眠りから覚めると、目の前に肉切包丁を持った男が立ちほだかっていたことがある。Absalom は大声で祈りをあげたが、その祈りの奇妙な英語の言葉に、殺害しようとしたその男は驚いた。何と言ったんだ、とその男が尋ねると、Absalom は神に祈りを捧げているのだが、もし、自分を殺すようなものがいれば、その男は苦しみをたずさえながら一生を送ることになると言ったのだ、と答えた。この男は恐ろしくなって、退散してしまう。1900 年義和団による北清事変や、国民革命軍による 1926 年から 1927 年にかけての北伐蜂起のころ、Absalom はこの地方での唯一の白人男性であった。しかしながら、彼は恐ろしいと思ったことはなかった。

彼の宗教活動は多くの面で大成功を収めていたが、ただ家族生活の面では決して満足できるものではなかった。彼は妻を心から理解しようとはしなかった。性格的にも 2 人は全く相反していたからだ。Absalom は子供達と接触する機会がほとんどなく、それに、Caroline のように子供達と一緒に遊ぶことは好きではなかった。子供のことは全く感知しようとしなない父親であったのである。その証しとして、娘が自分の誕生を振り返り、「Andrew にとって、そんなことはどうでもいいことで、全く意味のないことなのよ」と、作品の中で言わせていることでもわかる。Pearl Buck が高校生であったころ、通信簿を父親に見せたことがあった。幾何の成績が 99 点であったが、そのときの父親の言い分は、「いい点だ。100 点であれば、もっとよかったんだがなあ」ということであった。子供のころの Pearl Buck は父を嫌ったが、その理由もはっきりしていた。Absalom Sydenstricker は布教活動に大変熱心であるあまり、子供達を特別な思いやりの

眼で見てやる余裕はなかった。その後、老齡に達し、彼女が彼の面倒を見るようになる、彼に対する愛情も高まり、心から感謝するようになった。In Memoriamでの賛辞ばかりでなく、Pearl BuckはMy Several Worldsの中で父のことを最も愛情を込めて書いている。⁽¹⁸⁾しかし、Fighting Angelの中での最も強力な印象と言え、子供時代のこと、比較的若いころのさまざまな経験のことなどである。

Absalomにとって子供達は、自分の仕事に比べれば、何の意味もない存在であったのである。子供達はそのことをよく理解しているだけに、不快にさえ思っていた。数多くの中国人にとって、Absalomは有能な宣教師であり、神父であったけれども、わが子達には慕われる父親ではなかった。息子や娘達は、「これまで一度も手に入れたことのないもの、父が与えてくれなかったものなどは、到底縁のないものであった。それは、父が自分のすべてを神に捧げていたからである」と言っている。⁽¹⁹⁾Absalomは自分の宗教や、持ち前の優しさを子供達に納得させることができなかつた。余りに厳格で、近寄りたく、頑固で、しかも、思いやりのない父親であったのである。

彼は生涯、孤独であった。一家水入らずであった幼少のころも、恥ずかしがりやで、一風変わった男の子であった。生涯一度も親しい友を持ったこともなかつたし、妻とは情緒的かつ知的な交わりを試みるようなこともなかつた。自分の殻の中に閉じ籠もり、余人の意見には、全然耳を貸そうとはしない。神の御言葉を聴き、神と心をかよわすだけで、自分の考えがすべて神の思召しであることを決して疑おうとはしなかつた。まさに、Stephen Vincent BenétとRosemary Benétが、彼のことを現代のSt. Paulになぞらえたのも当然である。⁽²⁰⁾

1人の人間をまざまざと描写しているほかに、19世紀型改革運動家の、注目せずにはいられない輪廓描写、つまり、頑固な個人主義の本質とも言うおうか、方向次第ではGeneral Charles Gordonのような軍人、John D. Rockefellerのような実業家、あるいはDavid Livingstonのような探検家が輩出するほどの情熱がFighting Angelからうかがうことができる。Pearl Buckは、父親を、ある特定の時期にアメリカに広がった一精神の化身と見なしている。この精神というのは、従来の行動の正しさに確固たる信念を持って立ち向かう情熱のことで、

そこに基礎が置かれているのだ、と言う。彼女は作品の中で、次のように率直かつ正直に叙述している。

I have not seen anyone the like of [Absalom] and his generation. They were no mild stay-at-homes, no soft-living landsmen. If they had not gone as daring missionaries, they would have gone to gold fields or explored the poles or sailed on pirate ships. They would have ruled the natives of foreign lands in other ways of power if God had not caught their souls so young. They were proud and quarrelsome and brave and intolerant and passionate. There was not a meek man among them. They strode along the Chinese streets secure in their right to go about their business. No question ever assailed them, no doubt ever weakened them. They were right in all they did and they waged the wars of God, sure of victory.⁽²¹⁾

Pearl Buck はこれらの人々の真価も欠点もよく見抜いている。この視点均衡を考えると、「Pearl Buck による両親の伝記は、19 世紀の伝道的情熱を込めて捧げられた、独得な個人的特徴を描写した最高の作品であることに疑いはない。しかも、これらの伝記は、いつの日にか、過ぎし時代における西欧文明社会の極めて重要な一部として認められることになる⁽²²⁾」と述べている Henry Seidel Canby の観察にも信憑性が出てくる。

Pearl Buck は個人的な描写ばかりでなく、中国における伝道生活、特に、人間関係が社会的に堅く結ばれた地域社会での伝道生活の模様を生き生きと描写している。近所に住み、共に働くことを余儀なくされた、この地域の住民は、お互いに憎しみ合っていた。しかも、彼等を取り巻く外国文明と思われるものの中には、何ら慰めとなるものもなかった。したがって、不幸になるもの、性格が偏る人々がかなり多くなり、そのため伝道生活に関する諸問題が複雑化してきた。ある中国人の内縁の妻を娶った罪悪感から、結局、精神異常をきたした、親切な既婚宣教師の場合のような、いくつかの事例が引用されている。例えば、ある宣教師の場合は、周期的に発作を起こし、その間は自分の妻が不貞

を働いているのではないかと信じ込み、結局、殺害を企てようとする。当時、寂しい未婚女性の宣教師達も何人かいたが、中には厳格で無情な暴君のようなものもいれば、思いやりのある聖人のような人もいる。このような題材や、類似した素材は、*Fighting Angel* の随所に見受けられる。この作品のリアリズムと、きびきびとした描写力が、読者の心を強く魅了していくのであろう。

所々に見られる着想の繰り返しを除去するということのほかに、*Fighting Angel* をさらによりよい作品に改良するとすれば、その唯一の方法は、長期にわたる伝道旅行での Absalom の体験事例をより多く採り入れることであつたらう。Absalom の野外活動の描写には、大ざっぱな部分が見られるが、これは明らかに、彼が無口な性格で謙虚すぎるあまり、話題に取り上げることができなかったからかもしれない。

Fighting Angel は極めて簡潔な文体で書かれているが、それがかえって二つの点で正当化され、効果をあげていると言える。その一つは、Pearl Buck が子供時代の思い出と、父親に関するその後の知識を絡ませており、伝記として飾り気なく淡々と叙述されていることが、娘に対する父親の印象効果を高めている点である。第二は、単純な言葉の選択が、主人公の描写にはっきりと焦点を合わせ、勢いをつけているという点である。この散文の簡素さが描写を明確にさせていると同時に、より強い印象を与える結果となっているのである。

The Exile も *Fighting Angel* も共に、すこぶる優れた伝記作品に属するものであろう。両作品がノーベル賞委員会に大きな影響を与えたであろう、というのも容易にうなずけるところである。にもかかわらず、これらの秀作も Pearl Buck の文学的名声の衰えには如何ともしがたく、現在では軽視されている状況にある。しかし、優れた伝記作品の実例としてばかりでなく、巧みに描かれた2人のアメリカ人の実相として、また、特定の時代と場所の特徴をあらわしている歴史的現象の描写として再発見され、再評価されることは確かである。

〔注〕

- (1) 「1冊限りの大作」(佐藤重夫「Pearl S. Buck における苦悩の文学」中央学院大学総合科学研究所『紀要』, 第3巻第2号, p. 6)によるノーベル文学賞受賞の可能性が信じら

れる実例が、J. Donald Adams の「Speaking of Books」というタイトルの新聞記事の中で述べられている (New York Times, Sept. 22, 1963, Sect. 7, p. 2)。しかし、これについては、Pearl Buck の受賞がアジア人に対する、同情ある理解を高めたことが認められたという、西欧の読者層の認識のように、根拠のない、不正確な考え方もある。こうした概念は、例えば、The Literature of the American People, ed. Arthur Hobson Quinn, et al. (New York : Appleton-Century-Crofts, 1951) p. 840. のような最も信頼できる参考文献の中にも散見される。

- (2) New York Times, Dec. 24, 1938, p. 13.
- (3) Cornelia Spencer, The Exile's Daughter, A Biography of Pearl S. Buck (New York : Coward-McCann, 1944) p. 191.
- (4) Pearl Buck, My Several Worlds (New York : Day, 1954) pp. 161-62.
- (5) Pearl Buck, The Exile (New York : Day, 1936) p. 73.
- (6) Ibid., p. 76. Pearl Buck の母親が臨終の際に語った言葉のいくつかが、Wang Lung の台詞とまさに符合している。The Exile, p. 75 と Sons, p. 7 にも出ている。
- (7) Pearl Buck, The Exile, p. 168.
- (8) Ibid., p. 309.
- (9) Pearl Buck, My Several Worlds, p. 110.
- (10) Pearl Buck の父 Absalom Sydenstricker は、新約聖書をギリシャ語から中国語に翻訳した最初の人である。また、中国語慣用語法の本も書いている。Hayes Jacobs, "Pearl S. Buck", Writer's Yearbook 1963, No. 34, p. 41.
- (11) Fighting Angel (New York : Reynal and Hitchcock, 1936), pp. 242-47 に述べられている。
- (12) このような話は、Pearl Buck から Ida Tarbell へ、1934年4月29日付の手紙の中に詳述されている。この手紙は、Allegheny College Library の Ida M. Tarbell 遺稿集の中に収められている。Pearl Buck の Miss Tarbell へ、計5通の手紙がこの遺稿集の一部を構成している。
- (13) Pearl Buck, The Exile, p. 313.
- (14) "In Memoriam" 略伝のタイプ原稿が、Yale University Library の William Lyon Phelps 遺稿集の中にある。この Library には、Pearl Buck の手紙がかなり多く収められている。
- (15) Pearl Buck, Fighting Angel, p. 65.
- (16) Ibid., p. 99.
- (17) Ibid., p. 36.
- (18) Pearl Buck, My Several Worlds, p. 99, 258.
- (19) Pearl Buck, Fighting Angel, p. 209.

- (20) Stephen Vincent and Rosemary Benét, *Two-World Success Story: Pearl Buck*, (New York Herald Tribune, Jan. 18, 1942), Sect. 9, p. 5.
- (21) Pearl Buck, *Fighting Angel*, p. 75.
- (22) Henry Seidel Canby, "The Good Earth: Pearl Buck and Nobel Prize", *Saturday Review of Literature*, Nov. 19, 1938, p. 8.